

いつまめも

凜奈

広い教室にポツンとただ一人。運動場からは「ボール、パスして！」とクラスメイトが夢中で遊んでいる声がする。

私だって、みんなと遊びたいなと思いつつながら、机の上のお皿を見つめる。

食べかけのお味噌汁と白ごはん。小学一年生のミミはため息をつきながら箸を手にするが、どうしてもお味噌汁が苦手で箸が進まない。お豆腐やワカメはするする食べられるんだけど、汁だけがたくさん残ってしまふ。

ふと時計を見ると、時計の長い針がもう十を指している。焦って口にごはんや味噌汁の具を詰め込む。すると、どこからともなく小さなやわらか

い声がした。

「僕と『みそしるん』はお仲間なんだ。おんなじ大豆からできているの！ だからミミちゃん、

『みそしるん』のことも好きになつて！」

ミミはびっくりして、声の主を探してみると、お豆腐を噛むとやわらかい声が聞こえてくると気づいた。

「『みそしるん』って何だかかわいい」とミミはつ

ぶやき、お味噌汁をゆつくりすする。うーん、や
つぱり苦手だなと思いつつも、『みそしるん』と
心の中でつぶやいてごくりごくりと何とか飲み
切った。

それから、給食でお味噌汁が出てくると、お
豆腐がミミを励ましてくれた。小学校高学年にも
なると、ミミはすっかりお味噌汁を克服し昼休み
はめいっばいお友達と遊べるようになった。

「ヘルシー志向が流行りだからね。ミミちゃんはどう思う？」と飲料企画部の先輩が口にしなが
ら、ミミの前にグラスを置く。

ミミは「同世代の女子も好きそうですし、いい
と思いますよ」と言ったものの、なかなかグラス
に手を伸ばせない。今月から配属になった飲料企
画部では、ミミは入社三年目の若手として意見が
求められることが多いのだが、自分の意見に自信

を持たずにいた。頑張らなきやと思つて、グラスを口にするとか何か聞き覚えのあるやわらかい声が無い降りてくる。

「あの時の大豆です。『とうにゆうん』もいつまめも応援しているよ。」

ジェリービーンズトラベル

白木

私の祖父はちょっと変わった人でお世辞にも愛想がいいとは言えない人だった。そんな祖父がよく、小さなジェリービーンズを好んで食べていた。見たことのないパッケージの袋の中に、鮮やかな色をした小指の爪ほどの大きさのものが、ぎっ

しりと入っていた。私はよく祖父にそれをねだつたが、なぜかいつも食べさせてはもらえなかつた。

ある日、それが机に置かれたままになっていた。祖父がいらないことを確認した私はそつと中身を出してみることにした。淡い黄緑と、蛍光色のピンク、それからキラキラと金色のラメの入った紺色のビーンズが、手の平にころがってきた。それらをひとしきり眺めたあと、私は思い切つて一粒

口に入れ噛み締めた。その瞬間、パチパチと目の端に星が飛ぶような感覚がした。かとおもうと、突如広い原っぱがひらけてみえてきた。初夏の若草の匂い。青空に浮かぶ雲が原っぱに影を落としている。……ここは、唐人景？ そう思うのと同じ時に景色は消え、元の部屋に戻っている。

びっくりしたのと、面白いのとで興奮した私は、すぐに次を口に放り込んだ。また星が飛び、今度

は頬に冷たい風が当たる。目を開くと、幾重にも並ぶ桃色のランタンが川面に反射して輝いている。……ここは、新地中華街だ！

みえる景色はたったの一瞬。私は最後の一粒を口にいれ噛みしめた。次の瞬間には、夜の長崎の町を見下ろしていた。港から山の端にかけて連なる光がキラキラと輝いている。高い空の上から見る長崎の街並みはとても美しかった。ため息をつ

く間もなく元の部屋に戻っていた。さらに袋へ手を伸ばそうとしたとき、大きく分厚い手がむんずと、袋を取り上げた。

「お前には、まだ早かと！」

そう言つて、祖父は袋を服のポケットに押し込み、私を睨め付けると部屋を出て行ってしまった。

その後、何度もあれがなんだったのか祖父に尋ねたが、ついに亡くなるまで教えてくれることは

な
か
つ
た。
。